

冰

2
2017

第 2 期 (2017 年 1 月)



猛り鵜

能村 研三

能登の鵜祭

十二月十五日から十六日の早朝にかけて行われる能登の鵜祭を見に行った。これは、北陸勉強会の際立ち寄った、氣多大社の神事であり、勉強会の折、ご案内をいただいた中能登良川にある「鵜様の宿」総本家のご後見を務める道端ご夫妻からのお招きがあり、勉強会で現地との交渉役を務めた阿部眞佐朗さんに同行してもらった。

雪吊の締り加減や幹叩く
揮毫句は師の書にあらず石露の花
林立のステイク野菜雪来るか

裸木の扇開きのころざし

十五日の夕方、七尾線の良川に着。道端さんのお迎えをいただき、鵜様の宿で泊めていただくことにした。道端さんは、輪島の中津さんの親戚関係にあり、中津夫妻も既に鵜様の宿に到着していた。美味しい地酒とご馳走の後、早めに就寝、午前二時、外は雪が降り始めている中を、氣多大社に向けて車で出発した。

氣多大社は何度も訪ねているので、馴染みのある所だが、雪が降りしきる晩闇の中の神社のたたずまいは厳かな趣があった。

鵜祭は氣多大社の神事で、神前に

海鼠腸や強きままなる箸使ひ

中能登・鶉祭

猛り鶉を神と崇めて雪しぐれ

暁闇の冷えを纏ひて神鶉翔つ

鶉に勸進眉丈の夜気の冴ゆるかな

雪しぐれ眉丈平伏す鶉様徑

累累と誌齡や朴の冬芽満つ

放った鶉の動きから翌年の吉凶を占うもの。鶉は、七尾市鶉浦町で一子相伝の技を受け継ぐ小西家が、海岸で生け捕りにし、その年の当番である三人の鶉捕部が、氣多大社までの約四十キロを、三日かけて徒歩で運ぶ。籠に入れられた鶉は「鶉様」と呼ばれ、道中、鶉捕部は、「ウトリペー、ウトリペー」と連呼して通過を住民に知らせる。祭儀は午前三時から拝殿で行われ、神前に設けた木製の台に一对の蠟燭が灯る中、神職と鶉捕部が問答を交わした後、鶉が放たれる。鶉が台によどみなく上れば吉、なかなか進まないときは凶とされる。社殿の一番前に席をいただいが、祭儀を待っている間は寒さがいんしんと忍びよる中、鶉様が来られるのを待った。今年の鶉は元氣な鶉で、神前に放たれた鶉は瞬く間に、蠟燭を掻き消し突然漆黒の闇に包まれた。

能村 研三

蒼茫集



悔恨日

大畑善昭

* 枯るるもの枯れ山の音川の音

開戦日とは悔恨日十二月
忘年会一つ不参し止り木に
友在りし日の高原の冬泉
梟や少年は木の洞を知り
山里のライトに光るけもの眼

枯木星

藤森すみれ

山国の午後の日恃む恵比須講

* 雪来る八ヶ岳の骨格青年か
繋がれし舟が舟打つ枯木星
いくたびの初心よ冬芽ふくらみぬ

指に詩生れて干柿仕上りぬ
あまたなる山のこ糸聞く木守柿

漂泊

千田百里

* 東京の隙間をあるく一葉忌
夜汽車てふ旅もことばも古りて冬
泣き虫の翔師を憶ひ波郷の忌
虎落笛酒飲まぬ夜は膝を抱き

義士の日や漂泊に似て飲み明し
去年今年とは哀歎の交差点

冬ぬくし

菅谷たけし

菊花展準備や工事現場めき
銀杏散る晴れたる空の深きより

霜の夜や目覚めぬる間の自己嫌悪
鉢植系の柚子の初生子器量よし
シーソーの片方に父冬ぬくし
* ミシン踏む妻が二階に冬ぬくし

狐 火 森岡 正作

ライオンも獺も小春を慈しむ
冬風や昭和を畳み父の逝く
* 雨の中来て狐火を誰も言はず
一枚の座布団が城着膨れぬ
私を捜さないでと雪女
鶏小屋に獣跡ある深雪晴

沈黙考 梅村 すみを

耳たぶの冷たさに知る今朝の冬
* 障子貼り部屋が突然広くなる
吸るにはほどよきとろみ冬瓜汁
酔ふほどに声高くなる牡丹鍋

外海は白波尖る雁わたし
しぐるるや沈黙考石十五
龍安寺

安心の日 甲州 千草

* 安心の日の飴色や黄落期
目も耳も偉なる銅像小鳥来る
都鳥学生服を騒がせて
胴いづこ冬蟹美しき百の膳
湯を沸す出羽は根雪と聞きしあと
少年の丈を借りたる煤払ひ

十二月八日 内山 照久

* 十二月八日階段踏み外す
門柱のなき家に住み年用意
寒波来る迎へ撃つごと太極拳
大噓体内の水大揺れす
白息へ白息返す魚市場
梟や森に探照灯二つ

神話

宮内とし子

*冬三日月神話となりし鳥・獸
華麗なる明治を語る暖炉かな
石路咲くや渡り廊下の畳敷
近づいて離れて松の手入れ終ふ
ダウンコート中に赤子のゐるらしき
己が身を裏返したき日向ぼこ

冬枯れ

木村公子

河豚提灯泳ぎて駅の客迎ふ
本心を掴めぬままにおでん煮る
大公孫樹風ありて散り無くて散り
*歩まねば枯るる思ひの八十路かな
河豚売るる度に手締めや魚の市
耳聴く目ざとく冬の日の一人

黄落期

林昭太郎

憎悪とも愛ともポインセチア炎ゆ
*マスクしてひと日己に籠りをり

学食の椅子の軽さも黄落期
無愛想は先代ゆづり海鼠切る
霜の夜の金柑あまく甘く煮る
耳鳴りに耳聴くゐる霜夜かな

母の部屋

大川ゆかり

秋惜しむ電車一本遅らせて
勤労感謝の日いつもの家事こなし
*プロッコーリー茹で上がる時日向の香
*寒月光抽斗多き母の部屋
枯蓮天寿全うしてゐたる
シリウスや潮で汚れし船の窓

風の声

武藤嘉子

ゆく川の木々映しつつ冬へかな
*風に声あり夫呼んでみる芒原
花八つ手ほろほろ日暮れ道遠し
肩に來し落葉にふつと力抜く
冬の鴉あと一考とせきたてる
南天の実のあかあかと希みあり

初雪 高橋あさの

初雪や彩ある木々を鎮めをり
*北風の待ち伏せてゐるピルの角
こぼれては戻る冬木の雀かな
消えやすき日向のありて花八手
枯れ尽す山の素顔を安堵とも
これ以上見透かさぬやう寒月光

星の道 矢崎すみ子

*夜は星の道の朶を薫ぼつち
糊に日を添へて五瓣の目貼かな
大海へ水の蛇行や鳥渡る
農穰の野末に凜と吾亦紅
編み棒に作り目いくつ小鳥来る
解かれて丸き昔や糸糸玉

鳩時計 福島 茂

枇杷の花骨董趣味の家主ゐて
背後から獣の臭ひ枯野行く

凍つる夜の宇宙引き寄す天文台
押すことも押さるることも暖房車
*漱石忌百年動く鳩時計
鍋奉行前口上の長すぎで
落穂拾ひ 鈴木良戈

競ひつつ落穂拾ひの学校田
地下鉄は道化で満ちてハロウィーン
繰返す秋の磯波歌碑の裾
行く秋の川風を聞く芭蕉像
葛西橋渡りし真夜の濃き銀河
かいつぶり泳ぐも浮くも一列に

板前 上谷昌憲

着膨れの年寄りを詰め荒川線
冬うらら都電運賃先払ひ
時じくの雪に相寄る浮寝鳥
一匙の煮凝にある冥い海
極彩を尽くす盛り場年詰まる
板前の隠れたばこや枯柳

潮鳴集



沈黙

内山花葉

紅を増せ

荒井千瑳子

コントラバスの重低音や山眠る
*沈黙は強き問ひかけ蓮枯るる
能登島へ伝令冬の流れ星
白き白きムンクの叫び樹氷林
死はどこか明るき未来ぼたん雪

百年

菊川俊朗

着ぶくれて宇宙遊泳でもするか
猪鍋や二人奉行の睨み合ひ
落葉降る誰も滑らぬすべり台
曲玉は胎児の吐息冬あたたか
*凍鶴の百年そこに居るやうな

積善も余慶も無けれ日向ぼこ
家持の海一望に冬の月
神農を祀り越中冬ざるる
能登奇祭鶴様に吉をたのみ冬
*実は紅を増せと十一月の雪

深き眠り本

池美佐子

*楯の木の瘤隆々と冬に入る
枯蓮ざわざわ風の渡り来ぬ
神杉の深き眠りや冬の月
小春日の天まで届け肩ぐるま
時雨るるや百万石の氷室跡

冬構へ 板橋昭子

考へのまとまるまでを落葉道
冬うらら句碑守のごと亀岩は
冬潮の生絹のやうな一日暮れ
ふゆぬくし鶴様の宿は夜具を干し
*冬構へ加賀強情の血の欲しき

先師の句 須山 登

*頑張らないために頑張る師走かな
年の瀬や私が年をとるなんて
近松忌歳時記にみる先師の句
八代目中村左衛門襲名の柝や実千両
人がらの少しはみ出し冬帽子

気多小春 阿部眞佐朗

子午線の伊勢に連なり氣多小春
*こめかみに銀の一滴能登時雨
七五三入らずの森に抱かれけり
どてら着て疑ふことを忘れけり
ゐて欲しきひとは居らずにおでん酒

鬼ごっこ 栗原公子

雪くるかコーヒーミルの音おもく
をさなより預かるサンタへの手紙
*鬼ごっこ山茶花ようしやなく散らし
冬立つやスマートフォンは微熱もち
寒鴉一声ふと我に返りたる

神の領域 佐久間由子

光陰の落葉時雨に佇めり
*迷ひさう絹のうねりの芒原
一山の神の領域もみぢ滝
断崖は天のきざはし冬紅葉
残り咲く菊の気丈を括りけり

しぼり込む 菊地光子

自由とふ不思議な疲れ懐手
うるし屋の刷毛の反身も師走かな
*湯豆腐や火加減しぼり込む話
一斉に横断歩道を来るマスク
色変へぬ松や心の幹太く

飛鷹選評



能村 研三

冬 銀 河 無 弦 の 琴 を 奏 で を り 榎 本 秀 治

陶淵明に「無弦琴」という故事がある。無弦の琴を携え、酔えば、その琴を愛撫して心の中で演奏を楽しんだという話である。意味を要約すると、「存在するものを知るだけで、手段は問題ではなく、ものを楽しむ魂さえあれば十分である」ということになる。たとえ琴の音色が聞こえなくても、宇宙の冬銀河の無限の音楽を楽しむことが出来るのである。

鷹 匠 の 鷹 呼 ぶ 腕 す つ と 出 す 須 賀 ゆ かり

鷹匠による放鷹術の実演イベントがいろいろな場所で行われる。東京では正月に浜離宮で行われる。鷹匠から他の鷹匠への移動は「振替」という演技で、離れて立つ二人の鷹匠が鷹を放ち合う。野球でいうキャッチボールのようなもので、鷹は鷹匠の腕を蹴って飛びたつと地表すれすれに滑空し、むこうの鷹匠の腕に乗る。相方との呼吸のあった技で、その瞬間を見事に捉えた。

枯 蓮 や 源 氏 平 家 の 相 討 ち に 秋 山 ユ キ子

敗荷の状態がさらに進み、黄ばんだ葉は黒褐色に変わって、茎も力を失い、折れて哀れな姿になる。美しく儂いものの象徴とされ、半分水に浸かった刀折矢尽の無残な姿は源氏平家が戦った戦場の跡を見るような思いである。

還 暦 の こ れ よ り 脱 皮 冬 薔 薇 伊 藤 照 枝

超高齢化時代となり還暦は昔の意味合いと随分異なってきた。「第二の人生」「人生二毛作」などという言葉も聞かれるが、これまでの社会の荒波を潜ってきた人生とは異なっていて、ある意味では本当の自分の人生が送れることに期待が膨らむ。「これより脱皮」というポジティブな姿勢がすばらしい。

考 へ ぬ 幸 せ も あ り 浮 寝 鳥 石 橋 み どり

冬日和の池の日溜りには、気持よさそうな浮寝鳥が、首を器用に羽根の間に埋めて漂っていた。ほんとうに眠っているのか、どんな夢をみているのか、何も考えずにたたずんでいる幸せ感を羨ましく思った。

玄 海 の 蹴 立 つ 白 波 神 渡 し 内 田 順 治

神渡しは陰暦十月の頃の西風をいう。神々が出雲に参集する際、神々を送るために吹く風である。玄海灘に蹴立つ白波、風に乗って空を飛び給う神の旅姿を想像するのも、すばらしい口マンである。

沖作品



能村研三選

看経の声澄みわたる暮の秋

*

冬銀河無弦の琴を奏でをり

雪をんな音色せつなき一節切

蓮枯るる昨日の音を吸ひ尽し

縄文の窯跡いだき山眠る

秋天の先に手を掛けビル工事

山に生くるものの気配や霧動く

陽を弾く冬青草のうねりかな

ときめきは赤き手袋買うてより

*

鷹匠の鷹呼ぶ腕すつと出す

大の字に干さるるつなぎ冬青空

熊手市小さきおかめの福を買ふ

一隅の社灯りて酉の市

*

枯蓮や源氏平家の相討ちに

連山へ冬夕焼の帯傾る

茨城

榎本 秀治

埼玉

須賀ゆかり

神奈川

秋山ユキ子

福岡

伊藤 照枝

熊本

石橋みどり

長崎

内田 順治

一字づつ友のりハビリ石露の花
蒼穹や池を画布とし散紅葉
還暦のこれより脱皮冬薔薇
終の花芳せて鳥居 口
茫茫と歩いていく世の枯野かな
* 考へぬ幸せもあり浮寝鳥
ひとつづつ音を重ねて朴落葉
山茶花の溢るる思ひ散る思ひ
前向ひて進む他なし神の留守
* 玄海の蹴立つ白波神渡し
小春風猫の留守居の蟹が庭
八十路坂越えてやすらふ柚子湯かな
さきがけか咲き遅れしか狂ひ花
けやけくも佗しき花よ冬桜